

911.3
八

誹諧一橋全

まゝり一書ありて名つけて一橋と云

こゝ陸奥乃仕治本清凡排藩の

竹川若さかきとく都江戸中

こゝをてつて一橋のきいひひせし

本十百のこゝちて板板りて

今も凡そなかりは乃代もかきこ

のこゝをてつてしと名りつて



是なるは野田乃入江のふらふら
さるはあつたあつた難儀といふもの
いふやうやくしは道はたもむく
武さくひきくきくあかしのなせそと
たもふたあつたあつた是河志地
たしてそ花を河林りそ
さるの柳の洲思は一橋の雲中

藤子より車やいそを干晴

貞享三年九月初六の日活友新

いそをり序文

江戸 調和 芭蕉 五志

才磨 其角 萃白

コ高 嵐雲 曾良

京 一品 如泉 言水

湖春 信徳 仙菴

貞享三年 葉雲

羽州 尾花 澤

鈴木清風 選

三月廿日 即真

花吹雪 七日 露 亦 林 廓 式

芭蕉

懼く、結のこゝろは 細橋 遠

星 繼 ちを 多きく 水 芥川

米 一斗 一を 多きく 家 関 の 戸

名 自を 隣 ちを ねくろ 草 花

校 ぬき ぬき 桐の 葉を 刈

善衣・少くも出乃らら蓋て
 内外乃下向志川や多り
 寸でよ喜討手の使いあり
 一夜の變り薄づけいり
 ね明よ親もんといふ志たも
 生々・抄子乃水は流流
 夫無十おれ然教をせよなけき
 流
 意
 業
 業
 業
 業
 業
 業

三つ一の餅をおまふ山寺
 雪をお櫃やまふふ高みそ
 虹素は・めを ぼし句かき
 三つ申く麻のひとつ矢を真ふ
 舞くと軍丁よ氣ある朝露
 思ふ・これ 白粉をぬる
 高
 高
 高
 高
 高
 高
 高

膝琴の明の風梳をききしる
大

淡おのり牡丹ちりばり
昔

耳にともく妹の告ぐる時鳥
薫

つよたけき美濃の茶屋を
そら

札焼く刀を切りは信くま
流風

我がうつ有馬を及の山峯
静

栞に美在歌やうらぶら
二番

京去月夜ハッそ躍らん
染

物と行く毛のやむくの獨宿
蒼

眉ぬく神の御殿は魚ようつふき
薫

からのふくよあぬおきうちやうし
そら

しきもど買よ雪乃山及
こあ

表さきたなをよ捨り破き細
流

何色らなきて塩やぬ浦
薫

相國へ桂へぬひしん花と松
葉さ下りて春乃やまひ
昔

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 春, 乃, 花, 松, 葉, 下, り, て, 春, 乃, や, ま, ひ, 昔.

是れは... 湖名

本は... 類五... 蛙... 式

桜... 音割く

さ... 花乃... 花... 去

月... 笑... 花... 全

花... 花... 花... 全

光彦乃情狀残を看みし
 別りふみしハ翔の雲
 晚此暮暮に雲此秋枯槁也
 余所の躍り佛唱ふ
 水尾や木槿を枝折垣をじ
 鳴子と雀と鳴りし長月の光
 日乃昔も亦くもすすむ
 去 凡 去 去 去 去 去

拙う川堂より姉と妹
 武夫乃初氣三年今きあて
 暮の隙に富士城跡し
 旅ともも杆の二月花跡生
 日のとやうにをさるる家
 汲をそぬ憂世城館の命にて
 去 凡 去 去 去 去 去

福まは遂哉ふくぬ斬ひくき

小雨了も申るカクシクサ堤草の覺

布子若くは布子もぬる水のホコ

強り春へ身コウカク黄檗此釋迦ホト

神カミナリ唱かきあても松の色コノ青アヲ

埒チラチいけくに輪ウの千羽チホ飛トビ

いにしへの京の七夕指折て

凡

去

凡

去

凡

去

凡

秋さるる境月り顔カ

萩りよく地震チクあり恐オソらん

土子りつちりツチ寺テの裏ウラ迄

娘メ一帯ヒトにウチ畏オソをりれり多タ一ヒト

今イマのイマちチ〜〜緑キナンドよヨわワ〜〜水ミヅ

ちチ〜〜と天アマれ若ワカ戸ドれレ氣キ氣キ

主ヌシ成シ憐アハレ心ココロ道ミチのへノ珠タマ教キョウ

去

凡

去

凡

去

凡

去

月をの廿九日うつかりし
風をのそらけし葉のこぼさ
全

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

山浦を江や火を焚カク舟ボネ寄蛙

古書

高を遠まき草の折リ笛フエ流

年乃とぞも新瑞トクシ梅の覆フクレてトクシ公

世よなきさめと吐カキ書ツク續ツク香

年座イる軍治る秋乃月ツキ公

温泉乃林ハヤシよハヤシ見ミるミ不フとの萩ハギ風

石買いよ木賊川の^ニ徑をて

泣くよ^ニた^ニる^ニ迷^ニ果^ニの^ニ衣^ニ

氣^ニを^ニ法^ニを^ニあ^ニま^ニく^ニ氣^ニう^ニさ^ニさ^ニと^ニ食^ニ

実^ニけ^ニき^ニ指^ニり^ニ様^ニを^ニ終^ニ臥^ニス

子を^ニ救^ニを^ニ愁^ニと^ニ報^ニり^ニ時^ニき^ニ

いつら^ニ能^ニへ^ニき^ニ吉^ニ今^ニの^ニ楊^ニ

うち^ニ荷^ニふ^ニ炮^ニ燗^ニお^ニと^ニき^ニ師^ニ境^ニを^ニ

赤^ニ犬^ニ不^ニゆ^ニり^ニ入^ニ造^ニり^ニ自^ニ

渡^ニり^ニを^ニ約^ニ途^ニと^ニる^ニ閑^ニの^ニ跡^ニ

綾^ニを^ニい^ニご^ニり^ニ老^ニ女^ニの^ニ律^ニの^ニし^ニ

花^ニの^ニい^ニれ^ニ裾^ニあ^ニる^ニ道^ニの^ニ跡^ニ空^ニの^ニま^ニ

柳^ニの^ニ見^ニた^ニる^ニ遠^ニ里^ニの^ニ野^ニの^ニ跡^ニ

田^ニ乃^ニ年^ニの^ニ耕^ニ跡^ニの^ニ石^ニの^ニ様^ニ

京^ニの^ニ海^ニ邊^ニの^ニ河^ニの^ニ舟^ニの^ニ物^ニ刻^ニ

香

風

香

風

香

風

香

風

香

風

香

風

全

香

昼涼し月と星との明りに
 湯殿乃道の踏枝中毎
 優湯の寒のおらぬ金子の策
 夢より淡きしや馬の鞍ひ
 漸き為るも竹の道めわね
 太本作る伊勢乃米き
 年の秋を語任はゆるる候
 風香風香風香風香

誰人魂乃一々よりらん
 濱底津浪一ツ乃打越すや
 夏を緑の表二三寸
 皮つきののちを舟よ吹矢鏡
 氣のふらさ迷ふ時白くしき
 懐乃骨のくへらぬ世なりしを
 石守山より五日とめりて
 風香風香風香風香

花四半 鶯ニワ 鳥七ツ
喜埃現 月海子 遊多
全 凡

淡い色の花を
鶯の歌の
花の
鶯の
花の
鶯の
花の
鶯の

言水

馬子の袖は白か 乾飯寝か

炭火は居く 袴の羽を干す 流

東雲の石切音 鼓多ももん 同

風舟折れふ 木柱の 棟 水

詩を拾取 雨名月の日を恋 同

百里舟 弱れ一つ 戸う 祢 風

海の白き桔梗や義女の塚きん 水
忍びの小川 淵あらく喜きく 風
板屋うりゝゝぬき牛の目あふる 水
丈九十九子姫 五つもみん 風
六舟の物福 了る國もて 水
奠灯のの月王 佛いやは 風
時うほれをせ侍の腹きり 水

み埜出は 夢の下芝 風
嶽の出盃 成 遊 ゆき 水
帯の起し 月 崎く 凡
薺菜 袴松のふ 越 花 水
民 色 舟 法師 草 水
埋の金 あやな 雀の子 水
窓のすこし 舟 首 帳 水

大和路の秋迦宮宮の産を
い川園果蓬フクと母ハ乃ハ乃ハ
きみ見ゆも歌ハ結ハ腰ハおて
祖守ハ宮ハ五町地ハさしけ
照ハとくとくしと後の中ハ火の園
踏突ハ賤ハの引浪ハを待ハッ
六條ハ本ハ陸ハ具ハの道ハ終ハと
凡水 凡水 凡水 凡水 凡水

是ハ衣ハ常ハ於ハ於ハ伯父ハのハ産ハをハ継ハ
月ハ夜ハのハ秋ハすハうハらハ廟ハのハ若ハ川ハし
牙ハぶハぶハ羊ハ秋ハをハけハなハさ
のハ草ハ城ハ山ハみハぬハ舟ハ小ハ櫛ハきハと
我ハ是ハ氣ハもハ於ハ一ハ冬ハをハるハくハ
いハのハなハまハまハとハ櫛ハの中ハ小ハ是ハとハさハ
裏ハのハ口ハ尺ハ小ハ櫛ハ号ハれハと
凡水 凡水 凡水 凡水 凡水

花神も江川一筏流りて
木更山麻一二月の山
同

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

景

見たるくは糸馬なりて山桜

巻乃あとの蕨あは芝流

春の雨石乃笈の音をみて

月よりなるよおと蚊のニッ三ッ

語もまたまぶし敷を知らずの

鳥あらしし春乃風折し
風

神。主乃水汲むま。日の末。西
 う。六着。ま。う。べ。ま。死骸。あ。は。は。
 母親の利は。法。先。志。と。事。は。し。
 碑は。多。し。老。母。草。一。ま。と。
 浅子の雀。お。り。立。む。さ。く。よ。
 日のぼ。さ。く。も。銚。ひ。く。声。
 三。至。東。く。白。く。み。く。い。ま。東。の。町。
 志。凡。志。凡。志。凡。志。凡。志。凡。

女房をさ。さ。次。半。乃。小。車。
 立。衣。似。名。子。染。く。も。名。の。や。ま。
 端。歌。中。ま。た。に。意。田。宮。城。対。
 並。り。入。月。城。金。の。額。賣。
 枚。菜。ま。ふ。り。ま。ま。の。朱。電。
 蟻。の。居。て。汲。担。籠。の。清。水。成。
 心。り。肩。し。尾。の。地。真。
 志。全。凡。志。凡。志。凡。志。凡。

徘徊乃終り者とむる秋の雨
茶杵見立よ分る竹藪
風

東都尔聞一

人の遠の中は遠おけり也

一品

るが中尔常山らしとの増

花志至きまにこま江のき
清風

麻標つむ奥乃に巻よ人かきて
全

かの日さるる盆乃月乾
晶

をげ山や日さしつて果てん
全

築乃火消る秋乃知風
風

柝持田中乃井戸に水のて
 軍かぶるの柝乃十かへ
 釣鐘尔石打人の夕涼こ
 猿乃胃状賣る津の玉の町
 梅ちりて花咲と乃孫さき
 只陽姿乃墓尔塵なき
 業をいへる鏡の慈白出て

品 品 品 品 品 品 品

ニッぶ三ツぶ 雨草を打
 月入して志を隣のや孫見は
 旅寝乃石海乃鳴る音
 長崎乃袖のりか孫を呼ぶ事
 持戒の石と俗乃法師と
 泊浦く 越ハ土城かつまら
 七日日次え息 昼乃灯

全 全 全 全 全 全 全

砂^ゴ浜^ゴや^ゴ深^ゴ去^ゴル^ゴ水^ゴの^ゴ清^ゴなりん
 馬^ゴさ^ゴ東^ゴ成^ゴ依^ゴり^ゴ足^ゴを^ゴた
 木^ゴの^ゴう^ゴを^ゴう^ゴ伽^ゴ藍^ゴ煙^ゴ乃^ゴう^ゴづ^ゴま^ゴで
 薫^{スミレ}の^ゴ臭^ゴ乃^ゴ蕭^ゴと^ゴ坊^ゴ均^ゴ一^ゴ
 年^ゴ乃^ゴ雪^ゴを^ゴ百^ゴ日^ゴよ^ゴこ^ゴさ^ゴる^ゴや
 娘^ゴあ^ゴの^ゴせ^ゴり^ゴ離^ゴと^ゴ詠^ゴめ^ゴん
 美^ゴ隠^ゴ進^ゴ乃^ゴ徳^ゴ種^ゴよ^ゴ花^ゴの^ゴ一^ゴつ^ゴ津^ゴ
 全 全 全 全 全 全 全 全 全

及^ゴ虫^ゴ野^ゴ井^ゴ戸^ゴの^ゴ藪^ゴ埋^ゴ一^ゴ
 曙^ゴ乃^ゴ月^ゴ工^ゴ行^ゴ怖^ゴの^ゴ子^ゴを^ゴ捨^ゴて
 尊^ゴ佛^ゴ一^ゴの^ゴ函^ゴよ^ゴ蕭^ゴ萩^ゴそ^ゴな^ゴき^ゴ
 全 全 全

十分^ゴあ^ゴる^ゴこ^ゴほ^ゴる^ゴき^ゴる^ゴ忍^ゴ尔
 表^ゴあ^ゴの^ゴし^ゴ是^ゴも^ゴし^ゴれ^ゴと

一^ゴく^ゴき^ゴ入^ゴ乃^ゴ
 増^ゴあ^ゴらん^ゴ一^ゴ

七月朔日

奥の

松茸と塔の勃と魚涼と哉

如泉

わさぎ丹てし系乃るお櫻

湖春

森に燕の蛇の目を見て

言水

階川系乃日試 脆也

仙菴

浮生山笠一群乃徒を去

信徳

不思美乃里と熊の子拾ふ

素雲

朝月也與梁元在女窟之
雨二報乃流山川雲
右首韻略之

雨乃如門掖之於此也
山川前麻不轉也
曉乃轉末至問程其
帶一不月乃川
秘用也相據也
柿亦如之登下

佳集

卷四 佳集

蜻蛉乃飛つさ衣に衣さきて
 人花野辺平腕ヒナさかぶヒナ一ヒナ
 古々乃琵琶を吹乃音響ヒナ
 又平張子乃体一作ヒナ
 河松子袖乃自らの棟一也
 七日残さぬ思着乃体
 康なる銀杏の奥の水の音
 徳 菴 凡 棟 菴 凡 徳

朔旦車乃秋子つまヒナ
 金所子有字一竹の育ヒナ尼ヒナ
 扇の小筵拾子ヒナ
 花吉野京子矢教の名を種
 腕のや一初記録ヒナ
 蛙鳴星乃あさり井水さひて
 人とも思ふ乃露乃色をひく
 凡 徳 菴 凡 徳 菴 凡

物恨む女房うへの衣さきし
佐敷の松山艶子死へ去り
諸とも子夕日残輝の声くきて
穉子童乃糧と美翁
川産まぬ隣垢離丸男
梨の下枝千磔打音
百柱香月を小雨て空寂し

菴凡徳菴凡徳菴

三味線法師 乳母存香
持こり考子共開佛堂
花乃浮世の廿日号あり
獨活蕨寔の烟絶く
重雀桑うろく存の捨船
駕薬子あやし娘の不言
き婆なまけと桶子飯盛

徳菴凡徳菴凡徳菴

東重しや四月八日の待すて凡
邊の待待郭へ云 菟

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

汲多らぬ篋子凍む夕汁

羽州 清風

麻の染浸も山並の陸江野角

子かふる聲もまむ月の明るま同

鼻乃先ほく相撲ち巴く凡

櫛染や椎とらつら同

京子不ワケかる我菊の角

三島を君の信すゆりん 凡

同し毛より小別まゝぬりき 角

こゝちは奪元ての海堂小船 凡

鈴夕かま依松名田乃妙 角

艸の戸乃丸祿かりき以りて 凡

依しては麻志足音 角

露粉たうむき 方成翅り道可也 仙菴

由り思塚り 萩を折る 凡

残る月誰り旗竿乃朽ぬらん 菴

不乃このたものむ母成願は 凡

大晦花ハハ乃をりて 菴

新町乃登る乃原乃想 凡

後分み七里が後一話 同

孕めぬ容水干や通し 菴

入相乃鐘^ア千^カ筥^サ菜^イをい^キり

凡

魁^ノ菽^垣諫^ハカ^ク寸

凡

子^子張^ハハ^ハの帝^乃捨^テ社

凡

舍^利捨^クる雨^の曙

凡

淡^茅生^乃やと^重ハ^ハ嘸^の物^云し

凡

昼^盜人^の牛^一千^一系^ハ

凡

讀^志らぬ石^碑ハ^ハ己^の世^哉悔^ハ

水

木^市を^ハ松^の陰^ハハ^ハ火^成燒^ハ

凡

石^也ま^ハ箱^ハハ^ハ兔^の背^負ま^ハし

水

虹^切ハ^ハ銀^夕月^千入

同

塔^横千^一萬^也其^葛乃^這く^ハ王

凡

赤^子乃^飢ハ^ハ秋^の小^菽風

同

小^雨降^ハ足^踏お^ハ知^あわ^ハく^ハ

水

手^流い^ハく^ハ申^さす^ハ中^川の^松

凡

素衣白冠之冠子羽衣了
風鈴之風三木瓜の鈴垣

水
凡

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

女花冠りあり

山城より来たる女

呼^ア何^イ花^ウ自^エ雪^オ不^カ火^ク

仙 卷

初^ツ陽^ツ乃^ツ教^ツの^ツ子^ツ飛^ツ子^ツ年^ツ着^ツ

清 凡

今^ツ日^ツの^ツう^ツ海^ツの^ツ世^ツ子^ツあ^ツる^ツ昔^ツ

全

自^ツ城^ツ中^ツへ^ツ空^ツ乃^ツ桂^ツを^ツ枝^ツ折^ツり

卷

菘^ツ踏^ツ童^ツ池^ツ水^ツあ^ツや^ツう^ツ火^ツ

凡

卷

施_レ餓鬼守_ル女_リ | 髪をまきまきて
別_レ道伏_テ取_ル | 賤_ニ乃_リ曙_ル | 菴
十_ニ刺_テ途_ニ或_レふ_ス | ぐ_レ虚_ニ車_ニ | 凡
ち_ウウ_レ多_クの_レ | 一_ニを_レ松_ノ根_カ | 一_ニ | 菴
日_乃乃_夕津_湯の_レ | 絶_ス | 金_まび_て | 凡
峰_トと_川 | 一_ニ富_士を_レ見_ル | 一_ニ | 菴
獵_秘乃_風 | 一_ニ | 祿_を致_ス | 一_ニ | 凡

雨_乃乃_目 | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 菴
儀_乃乃_墨 | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 凡
杜_丹の_レ | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 菴
赤_良の_レ | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 凡
水_を | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 菴
錫_乃乃_又 | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 全
色_百色_乃 | 一_ニ | 一_ニ | 一_ニ | 凡

玄はう入房登つるまを世に知る
凡 卷

子成つてすまじく驚き山海
凡 卷

雨之乃かへさけは早まをるるま
凡 卷

陸より精くる帆柱の抑
凡 卷

十二年一先乃丁松指ふをて
凡 卷

まのむされくる吉原の里
凡 卷

小春の雪晴しや杖の香をふ
凡 卷

磔一心を神ようめを
凡 卷

為武者乃竹島捕つ藤川
凡 卷

静磁をうらむいつの朝舟
凡 卷

麻かりし懸ハあの時雨あ
凡 卷

男奔ニツ乃むよ強りし
凡 卷

大重の碇木魚乃香大純て
凡 卷

兼應残る石橋乃若
凡 卷

實拙き——花一團子餘り多ん 菴
業多し河雀の羽うらむかへる 凡

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

青神よ移り替り替り多し多し

種詩人多し多し多し多し 流

晴月燧の松を踏消して 全

紫乃戸志起る 大 函也 和

細き足てあしは風を思ひま 全

沫き眼よ山道く見ん 凡

調和

武花那の記を書きしるゝ意
和

心灯の音は世を捨し暮る
和

中しにぬき来さし流の真
和

身よさする理木の祀
和

折節は芦火さく登る端
和

佛の像を岩よ知つけ
和

暁の蝙蝠をこれいし
和

女を負て詠を足くへ
和

恵志らぬ草薺の草を薺
和

古き首より花より日
和

蝶を飛む口を描る池の
和

空駕を籠けて眠る陽
和

心なく親を死ね侍を
和

己をちり僧の山よ入
和

故の逸るも茶は煙らふまじし
 京乃草鞋とよつる松の井
 不破の園裁の日計の冠着て
 兼て契りし阿闍梨呼もは
 文苑の徳とる比よなりよまわ
 涼山の音車を削り秋風
 書を携ひ月沙をたむきぬ
 凡 和 凡 和 凡 和 凡 和 凡 和

甚石拾もん流乃象深
 まふまの命の孫よ養をま
 火燈は近き音乃櫛
 まさぬ夜の障子に佛はうき
 實をこころもるゐのうら泣
 其の日の時を何頃のまもま
 松をのつらう正月乃古
 凡 和 凡 和 凡 和 凡 和 凡 和

花の香をたぐふに、森あり
雨の風をたぐふに、風あり

赤寺町系土の町

村岡屋

筒井庄兵衛重勝 何故

本書の著者鈴木清風は我が郷土の生れた
俳人として又紅花大畫として廣く世に知られ
た人で、其の事蹟の研究は我が郷土にとって時代
相を深めるのに極めて大切なもの、やうに思はれる。
先づ俳人としての彼をたづねるなら、芭蕉翁が
「奥の細道」の旅を思ひ立った時己にその訪問を
予定されたと言はれてゐる程で、著書としてはこ
の「俳諧一橋」「後れすごらく」及び「いなむ」ら
等世に傳へられてゐる。しかし現在郷土に残って
ゐるものは一つもなかつたのでその所在を探すのに
幾（数年）を費したが、この「俳諧一橋」と「後れすご
らく」の二冊は昨夏たまく東京の某書店に
あることを聞き早速交渉したが直段も余りに



高價なので購入し兼ねたが今春にいたり漸く
経費の一部を町費 一部を持志者の寄附金に
より小學校の備品として購入することが出来た。

近頃これをき、右二著の寫しの頒布方を希
望する同好の士が多いので今回之を騰写にし製
本して實費で頒つこととした。幸かに其の道の参
考となれば此の上ない幸せである。

製本にあたり書寫の勞をとられた鈴木藤之助
氏及び尾花澤小學校職員諸氏に感謝の意を表
する。

昭和十一年十一月

尾花澤小學校長

長井小四郎

本書の...

